

もう一つの アイ・ラブ・パリ
 ー 日本で楽しむフランス ー

松村 茂治

「アイ ラブ パリ」と題して足かけ四年、本誌第二五号より四回にわたってパリ旅行に題材をとった拙文を認めてきた。旅行にまつわるエッセーを書いてみようと思ったのは、旅先で見聞きしてきたことを文章に表すことで、もう一度、旅気分を味わえるからであり、そうすることが次の旅への糧となると考えたからである。読んでいただいた方の心の中に、多少なりとも旅情を掻き立てられるような文章が書ければとも思ったが、やってみるとプロの文筆家のような訳にはいかないことがわかってきた。書いているときはうまくいっていると思わないでもなかったが、少し時間を置いて読み返してみると、くどかったり言葉足らずだったりして、そこに行つたことのある人にしか通じない

文章になつていくような気がしてくるのだった。第三十一号に「また、アイ ラブ パリ」を書いたところで、それ以上書くこともないので、このシリーズはひとまず幕にしようかと考えた。新たな「取材旅行」を考えないでもなかったが、彼の地への旅はしばらく見合わせた方がいいというパリ在住者からの忠告もあり、休筆やむなしと思つたのだが、日本にいても、フランスを楽しむことはできなくはないだろうと思ひ直し、五度目の挑戦をしてみることにした。つまり、「もう一つの」には、「五番目の」という他に、「旅行記ではない」という意味が込められているということをはじめにお断りしておきたい。前書きが長くなってしまった。

【六十の手習い】

定年退職を機に、フランス語の学び直しをすることにした。やや遅めの六十の手習いということになるが、これは急に決めたことではなく、漠然とではあるけれど、就職した頃から思い描いていたことである。だからと言つて、そのことを絶えず考えていたわけではない。この間、ジャンソンのCD一枚買うこともなく、日常生活の中にフランス語が登場してくることはほとんどなかった。しかしながら定年退職が秒読みに入ったここ数年は、手頃な参考書を購入したり、通勤電車の中でCDを聞いたりして、少しずつ気持ちを高めてきた。

世間には、「生涯現役」という生き方をしている人がいる。現役時代にやってきたことを定年後も続けることができ、しかもそれが収入につながるのなら、それに越したことはない。収入につながるなら、ボランテニア活動として社会とつながるといふことも意味のあることだと思ふ。研究者なら、生活の中心を書斎に置き、出かけるのは図書館のみという禁欲的な生活を通して、やり残した研究の完成、いや新しい研究を目指すこともできる。残念ながらと言えはいいのか、幸いにしてと言えはいいのか、私には、そのいずれもが難しいことのように思えてならなかった。

定年退職が近づくにつれ、今までとは別のことをやってみたいという思いが次第に強くなっていくのを感じていた。フーテンの寅さんではないが、「思い起こすだけに恥ずかしきことの数々」だったそれまでの生活を忘れてしまいたいという思いは確かにあつた。単に、他のことに目移りがするという浮気心の現れということも否定できない。

そういう気持ちだったので、七年前、三十五年勤めた前の職場を去るとき、職場に置いてあつた専門書や研究資料のほぼ半分を廃棄した。そして、六年勤めた次の職場を去るときには、そのほとんど（おそらく九九%以上）を処分し、そこから家に持ち帰つたのは段ボール箱一つだけという身軽さであつた。おまけに、数年前、自宅の建て替えを行った際には、自分の部屋を六畳から四畳半に縮小するのは使えないような仕事関連の書籍や書類が真っ先にその対象となつた。もちろん、学生時代から読みためてきた変色した小説なども処分を免れなかった。どれも長いこと手元に置いてきたものなので、もう少し未練や後悔を伴うのかと思つてはいたが、そういうことはほとんどなかった。モノが目の前にあれば、それにまつわる人々や出来事も思い出されようが、なくなってしまうと、それを持つていたということさえ思い出せなくなってしまうのだった。まさに、

「去るもの日々疎し」である。断捨離は、モノを処分することに主眼があるのではなく、処分を通して、こちらの気持ちを整えることに意義があるのだということが、やってみてわかった。そして意外なことに、(負け惜しみのように聞こえるかもしれないが)モノが無くなった喪失感より、これから始まるであろう新生活への期待感の方が断然に強くなっていることに気づくのであった。

【習い始めの頃】

学生時代に、少しの間ではあったが、フランス語の専門学校に通ったことがある。特にこの言葉に興味があったからというのではなく、必要に迫られてのことであった。当時、大学院の入試にはどこでも第二外国語が課せられていて、私は、学部時代にドイツ語を選択したものの、入試を突破できるような実力はなく、初歩からやり直さなければならぬと感じていた。おまけに、山に登ったり映画を見たり小説を読んだりしているうちに、四年間はあつという間に過ぎてしまい、気がつけば専門科目も極めて心許ない状況にあったので(だから、どうして大学院に行こうと思ったのか、今になって考えると不思議だ)、浪人は避けようと思わず、それならいっそのこと新しい言葉を身につけようと、アー、ベー、セーから学ぶことにしたのである。

彼の指導の徹底ぶりを垣間見ることが出来る。本のカバーを見ると、P*教師は、二〇〇〇年頃まで、アテネで教鞭を執っていたようだから、語学学校教師としてはかなりの「長寿」ということになる。

いきなり学校まで行ってしまったが、フランス語学習で真っ先に思い出すのは、学校そのものより、お茶の水駅前の交差点の向こう側にあった有名菓子店の看板である。

通学の度に目にしてきた看板には[GIRAUD]とあり、はじめのうちはどうしても「ジラウド」としか読めなかったのだが、しばらくすると自然に「ジロー」と読んでいることに気づいたのである。これはフランス語を学んでいる者にとつては感動的な一瞬で、なぜなら、授業で、フランス語では綴りと発音が密接に結びついており、「i」は「イ」、「au」は「オー」、語末の子音は、発音されないことが多い(たとえば、車のルノーは、Renault と書く)と習ってきており、それを身近なところで確認出来たからである。

「ジロー」が読めるようになって、気をよくしたのでろう、不遜にも、実力を確かめてみよう、学校の帰りに新宿紀伊國屋の洋書売り場をのぞいてみたのである。「星の王子さま」なら、話の内容はよく分かっている、フランス語に多少の無理があつても、何とかなるのではないかと思つたのである。

当時通つたのは、お茶の水駅から水道橋駅の方へ向つて十分ほどの所にあるアテネ・フランセである。その場所も校舎を彩る派手な紫色のペイントも、今も当時と変わっていない。校舎は駿河台の斜面を上手く利用して建てられていて、授業の合間によく利用したラウンジは、通りから入ると地下一階にあたる所にあつたが、そこから神保町方面の街並みを見下ろすことができたので、まるでビルの三階か四階にいるような感じだった。

ここに通つたのは、半世紀近く前のことであり、当時習つた先生は、もう誰もいないだろうが、数年前、今回の「手習い」のためにと、参考書を物色しているとき、偶然にも、当時アテネ・フランセで有名だった教師の名前が載っている本を見つけて買い求めてきた。この教師は、アテネにP*あり、と言われるほどの有名人ということだったが、ウワサが私の耳に入ってくる頃には、指導熱心で授業には活気があると言うより、すぐに大声をあげ、時にチョークが飛んで来ると言うことになっていた。

私は彼の授業は受けてはいなかったものの、彼が著した文法書は、当時の私のためにフィットしていたこともあつて、かなり使い込んだ記憶がある。私のフランス語の実力のかんりの部分は、この文法書のお陰と言えり。その几帳面な構成は、今回購入した参考書にも受け継がれていて、

表紙に、小さな惑星の上に立つ金髪の王子様の描かれた本はすぐに見つけることはできた。しかし、本を手にとりページを繰って、愕然としたのだった。文章の意味がさっぱり分からないといったレベルではなく、見たこともない言葉のオンパレードなのである。習い始めて数ヶ月で小説を読むなどというのは、大それた考えだったのであると納得しようとしたのだが、それにしても、冠詞の一つも分からないというのは、一体どういうことなのだ。この調子でいったら来春の入試も絶望的だと、暗澹たる気持ちになり、手にした本を元の棚に戻そうとしたとき、少し感じの違う「王子さま」が何人もいることに気づいたのである。

いや、表紙の絵はどれも同じ王子様なのだが、どこことなく雰囲気が違う。よく見ると、フランス語以外に、英語やドイツ語の「王子さま」がいて、手にした本をよく見ると、何とそれはスペイン語の「王子さま」だったのである。スペイン語だったなら分からなくても仕方がない・・・と安心しようとしたのだが、考えるまでもなく、数か月学んで、同じラテン系の言葉とはいえ、フランス語とスペイン語の区別もつかないのでは、やはり翌年の試験は危ないかと、もう一度落ち込んだことを覚えている。

そのとき購入したハードカバーの「星の王子さま」(ガリマール社版)は、今でも手元にある。奥付には、一九七

○年一月十五日の増刷とあり、私が購入したのは、その年の夏頃のことだろう。本の見返しに、店員が書いたと思われる一二四〇円のメモが残っている。現在七、八百円の岩波新書が一五〇円だった頃のことである。直接比較は出来ないにしても、王子様だけあって、かなり裕福な暮らしをしていたようだ。

【妻とは別の女性】

大学院入試の手段として学び始めたフランス語であったが、真剣に取り組みれば取り組むほど面白くなってきて、大学院に入学してからも、アテネ・フランセにはしばらく通うことにした。そして気がつくのと、大学院での専門の勉強より、フランス語の方が面白くなり、一時は、大学院を止めて、こちらに鞍替えしたいと思うほどになっていた。

その頃偶然手にした、確か、なだいなだのエッセーだったと思うが、専門の医学の勉強の傍ら、フランス語に取り組んでいた作家（の卵）は、いつしかこちらの方に強く惹かれていくことに気づき、そのときの気持ちを、妻とは別の女性に心が奪われるのと似ているといった説明していたのを読んだ覚えがある。当時、私はまだ独身だったので、「妻とは別の女性」と言われても、実感としては理解できなかったが、本業以外にのめり込む作家の姿に、自分自身

を重ね合わせることに、一度ならずであった。その後、妻帯者となり三十有余年、作家の言っていた意味が、実感を持って理解できるように・・・ああ、そういうことを言いたいではなかった。専門を持ちながら、それ以外の方に心が向いてしまうということは、そこで新しい方に乗り換えると、論理的に言えば、今度はそれが「妻」になるわけで、それだと、また他に魅力的な存在が現れてくるということになって、何だか收拾がつかなくなりそうな気がしてきたのである。

一人の「妻」の下に留まって四十有余年、「別の女性」の面影は、すっかり忘れ去られていたのだが、記憶の彼方から、懐かしく愛しい声が、私を呼んでいるような気がするのである。そういうわけで、六十の手習いは、初学ではなく学び直しということになるのである。彼女は、変わってしまったらどうか？

【何のためのフランス語？】

先に、「やや遅めの六十の手習い」と書いたが、還暦は遠の昔に過ぎていく。そこで、念のためにネット情報に当たってみると、「六十歳になって文字を習い始めることか、学問や習い事をするのに年齢制限などなく、たとえ晩年に始めても遅すぎることはない」という意味が込め

られている。年をとってから習い事や学び事を始める（晩学）という意味で、『六十』は『七十』『八十』でもよい。」とあった。いくつになっても「四十肩」というのと同じことなのだ。

それにしても、六十にして始めるのが、なぜ絵画や舞楽ではなく、文字、つまり習字なのだろう。文字を書くということは、他の芸事に較べたら、極めて日常なことであり、現役中に磨いてこそ意味があるのではないか。隠居してから始めたところで、実用という点では意味がないように思えるのだが・・・。

もつとも、実用的ではないという点は、私の手習いも同じである。世はグローバル時代、実用を優先すれば、フランス語ではなく英語にすべきであろう。フランスに行ったところで、ホテルもツアーガイドも、幅を利かせているのは英語である。フランス人は、英語で尋ねたら、分かっているも応えてはくれないと聞いていたが、私の体験した限り、そんなことはなかった。ロアールの古城観光も、エッフェル塔のガイドツアーもみな英語だったし、大通りを歩いているとき、私の尻のポケットと信号待ちしている少女の集団を指さしながら、掏摸に注意するように教えてくれたのも英語だった。ホテルで、たどたどしいフランス語で要件を伝えようとしたら、向こうから「英語でもいい

よ！」との返事が返ってきたほどである。

そのような時代にフランス語というのは、時代の流れにそぐわないのかもしれないが、そこにこそ、私がこの言葉を選んだ最大の理由があるような気がする。試験や仕事のためではなく、趣味として、それ自体を楽しむことが目的なのだから、実用的である必要はないというか、実用的であってはいけないというか・・・。それだったら、ラテン語の方がいいのではないかと言う人もいるが、それだと私が求めているのとはずいぶん方向が違うというか行き過ぎてしまっているような気がする。実用は考えないとはいえ、モーパッサンを原語で読むくらいのリアリティがないと、モティベーションが保てないと思うからだ。

敬愛する鹿島茂先生は、最近「フランス文学は役に立つ！」という著書を出版しているので、案外、実用的なのかもしれないが、本当のところはどうだろう。もつとも、「役に立つ！」とは言うものの、この本は、副題に「『赤と黒』から『異邦人』まで」とあり、著名なフランス文学（小説）についての解説と数行の原文鑑賞といった構成になっている。そうした中でどのような役立て方を想定しているのか、本は手に入れたもののみだ読んでいないので何ともいえないのだが、表紙には、「恋愛において『やってはいけないこと六か条』を学びたいあなた」とあるから、

やはり私個人にとっては、あまり役に立ちそうにはないような気がする。

この文章を書いている最中、今年（二〇一七年）の大阪大学の卒業式での学部長の式辞が話題になっていくとニュースに接した。「文学は役に立つのか？」との疑問に、その道の専門家として答えているというのである。

私が学生時代、サルトルが「飢えた子の前で、文学は何ができるか」との挑発的な発言をしていたことを思い出すサルトルは、参加の文学（アンガージュマン）ということを主張していたので、そうした文脈の中で理解した覚えはあるが、もっと深い意味があったのかもしれない。

阪大の学部長の発言は、同じような問いかけだが、その意図するところは、サルトルとはずいぶん異なっているように思う。手に入れた資料を読む限り、彼の主張のポイントは、「文学部の学問が本領を発揮するのは、人生の岐路に立ったときではないか」というところにあるようだ。昨今、理工系、医学系などの実学指向の学問が厚遇されるのに反し、文学や哲学は現実的な利害に直結しないために軽んぜられる傾向にある。文系だけではなく、理系でも、いわゆる基礎的な領域に関しては、実用から遠いということからか、風当たりが厳しいと聞く。学部長の発言は、そうした風潮の中で、必ずしも実学的ではない学問を追究す

る自分たちの存在意義、そして文学部に籍を置いてきた、あるいはそこを目指す学生たちのアイデンティティを確かにするためのものと理解する。

ところで、私にとって、フランス語がどのような役に立つのか、いや、役に立たなければいけないのかということについては、これから時間をかけて考え、体験してみようと思う。ちなみに、学び直しをはじめて一年が過ぎたところだが、「やっつてはいけないこと」に関しても「人生の岐路」に関しても、未だその機会には恵まれず、役に立ったかどうかの報告が出来る状況にはない。

【語学学校さまがわり①】

学び直しに際しては、お茶の水の学校も考えたが、最近すっかり横浜が生活圏になり、そして何よりも、電車によつては乗り換えなしで行くことが出来るので、横浜駅の二つ先、関内駅近くの学校を第一候補にした。

説明を聞きに行つて教科書を見せてもらい、軽い衝撃を覚えた。これが教科書なの？という戸惑いと言つたらいいだろう。なだいなだ流に言うなら、彼女はすっかり変わってしまったように思えた。学校はフランス政府の公式機関であり、教科書もカリキュラムも政府の管理下にあるのだろう。日本以外の国でも、正当なフランス語学習には

この教科書を使っているはずで、日本の大学でも、使っているところがあると聞いた。そうした権威ある教科書だが、手にしたカラー印刷A4版は、一言で言う、教科書らしくないと言つたらいいのか、どのページも、雑誌のグラビアページのような作りなのである。しかも、ページによっては、あちこちから取ってきた記事が雑然と貼り付けられているようで、カラージュといったら少し大げさになるが、何とも統一感が無く、これを使つてどのような授業になるのか、イメージが湧いて来なかったのである。

昔使っていた教科書は、原則的にモノクロ印刷で、当然のことながら、横書きの文章は、ページに対して常に平行で、決して面白い作りとはいえないが、落ち着きないしは統一感があった。学ぶ内容についても、ここでは形容詞の比較級、次は動詞の受動態といった具合にはつきりしていて、典型的な例文があり、それを手掛かりに本文を読んだら、練習問題をやるようになっていたのではなかったか。

そして、本文は、私たち外国人学習者が理解できるように、おそらく教科書用に作られたのであろう、平易な文で書かれており、学習の進度に比例して、文章は難しくなっていく。最近になって、「アイ アム ア ボーイ」や「ジス イズ ア ペン」といった、初歩の英語でお馴染みの文について、ネイティブは絶対に使わない言い回しだ

と耳にしたが、今さらそんなことを言われても困るのだ。私たちは、そういう例文で外国語を学んできたのだから。そうしたことへの反省からか、最近の教科書は、英語もフランス語も、実用性を重視し、ネイティブの人にとつても不自然ではないように、そして欧米に行つたらすぐに役立つような内容になっている。

教科書に衝撃を受けると同時に、授業の進め方（カリキュラムと言つた方が良いかも）にも意外な感じがあった。授業は、原則的に週一回（約二時間）、十週間で一学期、一学期で教科書の四課を学習することになっているという。この説明を聞いて、ずいぶんとのんびりしているなと思つたのである。なぜなら、このペースだと、四十八課から成る教科書を終えるのに百二十週（丸三年！）かかることになるからだ。それで文法を一通り学ぶことになるといふのでは、来春の試験には絶対に間に合わないと思つたのである。

授業を受けるようになってしばらくして分かってきたことだが、教科書の本文は雑誌や新聞、インターネット等に掲載された写真や文章が、多少の改編はあるにしても、基本的にそのまま使われていて、教科書を読んでいると言うより、雑誌のコラムやイベントのポスターを見ているような感じなのである。そのいくつかを例に挙げれば、どこか

の港町で開催され音楽祭のパンフレット(そこまでの行き方や宿泊施設、申込み方法等が説明されている)、パリのセーヌ河畔が夏の一時期、浜辺に変身することを伝えるポスター(二年前、ノートルダム寺院の方から歩いてきて橋を渡ったところで、会期が終わったのだろう、人口海浜の砂の片付けをしているところに出くわしたことがあった)、モロッコで開催されるラリーへの参加者を募るインターネットのサイト記事、「五十歳、まだまだこれから！」との表題の下に書かれた雑誌記事と、決して五十歳には見えない美女が微笑む写真・・・といった具合である。どれも教科書のために作られた文章ではなく、巷に流布ものの転用(?)なので、絵空事ではない生の教材ということは理解できるが、長い間「教科書外国語」に馴染んできた身には、現実感がありすぎて却って戸惑ってしまう。実用的ではない型にはまった文章なら理解できるが、普段みんなが使っている言葉が理解しにくいのと同じである。

そうした教科書で学び始めて数ヶ月経ったとき、この教科書には珍しく(?) サルトルとカミュの文章が掲載されている頁に出くわした。どちらも十行ほどの短いものだったが、「これが教科書でしょう！」との思いを抱きながらむさぼり読んだ。たかだか十行ほどの文章をむさぼり読むというのは、適切な言い方ではないかもしれないが、気分は

そういう感じであった。オー・ヘンリー、パートランド・ラッセル、サマセット・モーム等で培われた語学学習の基本姿勢は、半世紀以上の時間を経ても全く変わっていないようだ。

【語学学校さまがわり②】

学び直しに当たって心配だったのは、クラス(教科書)のレベルもさることながら、一緒に学ぶことになるクラスメイトのことだった。学校のサイト広告には、年配の受講生もいる旨が書かれているが、生きの良い現役学生の中に一人ボツンと置かれるとなると、すぐに息切れを起こすことになるだろう。しかも、全くの初歩ではなく多少の経験者ということだと、転校生のように既存のクラスに編入されることになるはずで、思えば、長い学校生活のなかで、転校生の経験は一度もない。つまり、高齢に加え中途転入という「二重苦」を抱えてのスタートとなるわけである。

選んだのは、金曜日の午前のクラス、十二、三人のクラスメイトの中には私より若い人もいるが、多くは同世代と見えた。考えてみれば、ウィークデイの昼間に、定期的な一定の時間を割くことができるのは、常勤の仕事を持つ人たちではないだろうが、ほとんどが私と同年代というのは意外であった。

昔通っていた語学学校では、どのクラスも若い現役の学生たちで一杯だったように記憶している。私も学生の一員ではあったが、大学院を目指す浪人生というのは例外で、ほとんどが、高校を卒業して大学には進まず、実践的なフランス語を身につけるために通っているか、都内の大学に籍を置きながらダブル・スクーリングとして通っている学生たちで、高齢者を見かけたという記憶はない。クラスによつては、十数名の受講生の中に家庭婦人が二、三人いたこともあったが、今の私のような高齢者はいなかった。私自身、同じような身分なので、こんな風に言うのはナセンスかもしれないが、定年退職をするような年齢になつて外国語を学ぶというのは、どういう心境によるのだろう。向こうに行ったとき、ホテルやレストランで困らないようにという人もいるだろうが、仕事で必要だからという人もいないようだし、向こうでの生活を予定している人もいないようだ。

ところで、外国には(フランスには)言った方がいいか? 私たちのような高齢者が、教養のためあるいは趣味のために、取り立てて現実的な実用を考えることもなく、日本語を学ぼうとするようなことはあるのだろうか。おそらく、私たちのような現象は、明治以来、舶来物にあこがれてきた日本人に特有のことなのではないかと思うのであ

る。とにかく、私たちが私は、「フランス式の」とか「パリジエンヌは」とか言われると、つい、心ときめかせてしまう悲しい性の持ち主なのである。

話がやや脇道に逸れてしまったが、七十の手習いは、高齢者の転校生という二重苦にも拘わらず、順調な滑り出しとなった。クラスメイトたちは、どちらかという時間には余裕のある人たちが(余裕のある日を授業に充てているとうことかもしれないが)、授業の後、少し時間をかけて皆で昼食をとることがもう何年も続いているということ、早速その仲間に入れてもらった。

何年も・・・そう、クラスメイトの大半はこの学校でアール、ペー、セーの初歩から始めたらしく、ほぼ同じメンバーで、入門クラス、初級クラスと、四、五年かけてやってきたとのことである。講師のS**先生は、このクラスを数年も受け持っているのです、まるで小学校の学級担任のような感じがする。つまり、私は、小学校入学から一緒だった四年生か五年生のクラスに編入したような気分であった。

多くの高齢者が語学学校に通う時代だそうである。しかしながら(いや、そういう時代だから、というべきか)、最近目にした週刊誌(週刊ポスト 九月十五日号)の広告に、「定年後、やっつけはいけない十箇条」として、資格、ジム通いとならんで語学とあったので気になり、学校の帰

りに買って読んでみると、「ビジネス英会話習得は無駄に終わる可能性が高い」「これまでに挫折したり、習得できなかった能力をビジネスで力にできるところまで高められるか」とのことであった。これだったら安心である。第一に、私が学んでいるのは英会話ではないし、ましてやビジネスに使うなどとこれっぽっちも考えていないから。それにしても、「定年後」としていながら「ビジネス」というのは、どういうことなのだろう。再就職ということなら、それは現役ということではないか。「定年」まで勤め上げ、改めて「現役」として復活しようというのだろうか？

このことに関連して、最近読んでいた、フランスやフランス人を紹介する本の中に、気になる記述を見つけた。現在、全世界でフランス語を話す人は、フランス本国で七千万人弱、カナダやアフリカの一部など、いわゆるフランス語圏でおよそ三億人ということだが、ある推計によると、フランス語圏の人口は、二〇六〇年までに、主にアフリカ諸国の人口増加により、四億人近く上積みされるというのである。それは、フランスにとって大きなビジネスチャンスになるそうで、そのためには、英語と中国語が幅を利かせている昨今のグローバル化の中に、フランス語を広める必要がある、その一環として、外国に学校を開設しフランス語の普及に努めなければならないというのである。

私たちがいや私は、ビジネスとは無縁なものとして、日々フランス語に取り組んでいるが、グローバル化の中のフランス語の普及というフランス政府の思惑があるとすれば、それは、アフリカの学校だけでなく、横浜の学校にも適用されることになるのではないか、つまり、ビジネスは関係ないなどと言ってはいられなくなるのではないかと心配になったのである。そうすると、今のようなアットホームな雰囲気でのフランス語学習は望めなくなってしまうのではないか？

しかしながらよく考えてみれば、二〇六〇年を想定してのことというなら、とうてい私の生きている間の話ではないので、高齢者が気をもむ必要はないのだろう。

【道草・再び、一枚の絵を追って】

ずっと学校の話が続いてしまった。「学び直し」について書いているので、当然と言えばそれまでだが、書いている本人でさえやや単調に過ぎるように思うので、ここらでちょっと道草を食ってみることにしよう。

本誌第二十六号に、「一枚の絵を追って」という小文を認めた。箱根のポーラ美術館に、モネの「ルーアン大聖堂」が展示されていることを知って出かけたときのことを書いたものである。

その前の年、初めてのフランス旅行でルーアンまで足を伸ばし、ルーアン大聖堂の実物を見てきた。その時点では不覚にも、モネがこの大聖堂を題材に、連作を仕上げているとは知らなかった。その後、パリに戻って出かけたオルセー美術館で、四枚の「大聖堂」に出会ったのである。出会ったというより、実物を見てきたお陰で絵の存在に気づいたというのが正直なところで、そうでなければ、モネの一作品というだけで、特に印象には残らなかったのではないかと思う。絵を実物と照合するようにして見ることにになり、素人なりにモネの絵の特徴がよく理解できたように思ったのである。つまり、私のモネ理解の原点は「大聖堂」にあるといっても過言ではない。

日本に帰ってから出かけた箱根で五枚目の「大聖堂」と巡り会い、二年前再び訪れたパリのマルモッタン美術館で六枚目、ジベルニーのアトリエで七枚目を鑑賞してきた。気持ちとしては、世界に三十数点あるという「ルーアン大聖堂」を一ヶ所に集めて、一度に鑑賞したいところだが、そういうわけにもいかない。今年（二〇一七年夏―秋）、上野で開催中のポストン美術館の至宝展に「大聖堂」が含まれているという。八枚目が我が国で見られると知って、行かないわけにはいかない・・・

A*先生

すっかり、ご無沙汰いたしております。

この前、横浜でジャズライブを楽しんでから、あつと言う間に三月も経ってしまいました。その後、いかがお過ごしでしょう。

そのときには話題にならなかったと思いますが、何処かで見たと宝展の案内に、モネの「ルーアン大聖堂」が含まれていることを知り、出かけて来ました。先生もお出でになったのでしょうか？素人なりに、「面白い体験をしたので、お知らせしたく、文章に認めています。

まず、至宝展全体としての印象ですが、あまり好感は持てなかったというのが正直な所です。「大聖堂」を見るのだとの思いが強かったからかもしれません。エジプト美術の現代美術まで、そうそう、一番の売りはゴッホだったようですが、何ともまとまりがなく、言ってみれば成金趣味のてんこ盛りような印象でしたので、シニア料金が一般料金のおよそ半額というのをいいことに、思いっきり贅沢をして、つまり、数枚を制限して見てきました。本来なら、一枚だけでよかったのですが、そこは生来の貧乏性のため、ちょっと目移りがしてしまいました。

ポストンの「大聖堂」は、構図的には、箱根の「大聖

うな気がするのである。

たとえば、語学学校で使っている教科書の中に、直訳すると「動く（あるいは、回転式の）肘掛け椅子」なる言葉を見つけ、さっそく「ジュニア」のページを繰って見た。すると、「身体に障害のある人が移動するのを可能にするための、大きな車輪のついた肘掛け椅子」とあった。「車椅子」と言えば済むことだが、そう言い換えたところで、その意味が分かっているなければ何もならないということに、改めて気づいた次第である。

この体験を皮切りに、辞書を読むことに興味を覚え、一、二行の説明をノートに写して「鑑賞」することもあった。今や、座右の書になりつつあるジュニア版ではあるが、製本にやや難があり、たいして使い込んでいないのに背の部分から数ページが剥離し、次第にそれが拡大しつつある。半年ほど前に、この辞書の「卓上版」が我が国でも容易に手に入ることを知ったので、それを手元に置いておこうと考えているのだが、ジュニア版には、もう一つ重大な欠点があることに気づいた。収録語数は約三万語ということで、小中学生の学習という点では差し支えないのだろうが、大人向けの本を読んでいて知りたくなかった言葉が、載っていないことがあるのだ。えっ、どんな本のどんな言葉が載っていないのかって？それは想像にお任せしよう……。

はない。そこで、できるだけ時間をかけた読み方ができないかと考えたのである（しかしながら、後になって、急かされる状況に陥ってしまったのだが……）。

世は、「超速読」の時代だそうである。ときおり、新聞に、「五分で文庫本が一冊読める！」のキャッチフレーズの下、頭の回転・記憶力を良くする、潜在能力を開発し、膨大な情報量に対応できるといった誘惑的な言葉で「超速読法」を勧める広告を目にすることがある。

若者の活字離れ、本離れが指摘されて久しいが、書店に行つて驚かされるのは、店頭に並ぶ出版物の多種多様さである。文庫本一つとっても、昔は、岩波か新潮か角川か、選択肢は三つしかなかったといつても過言ではない（おっと、それにハヤカワがあつたので四つか？）。ところが今や、文庫本と新書本だけでも、ちよつとした一店舗が構えられるくらい充実ぶりで、コミックや写真集まで含めると、最早、書店は出版物の洪水あるいは本の迷路のような感じさえする。そうした中で、溺れないためには、道に迷わないためには、一冊を五分、十分で片づけることは必須の技術ということになるのだろう。しかしながら、自分にそうした潜在力があるとも思えないし、今さらそんな能力を開発したいとも思わない。

プロの文筆家の中には、文章修行の一環として、気に

【超速読のススメ】

定年になる少し前に、「フランス語で読もう『異邦人』」という対訳本を見つけて購入しておいた。カミュの「異邦人」は、フランス語の勉強を始めた人が、「星の王子さま」の次くらいに、原文で読んでみたいと思う本の一冊ではないかと思う。一世を風靡したノーベル賞作家の作品であるが、文法的には比較的平易に書かれている上に、文庫本にして二〇〇頁程度なので、分量的にもそれほどの抵抗感はない。手元にある文庫本は一九七〇年発行のもので、購入日のメモはないが、手に入れたのは、その年かその翌年であろう。紙は劣化して茶色く変色し、古本独特の臭いもするが、単語調べも書き込みもほとんどなく、読んだのは、「今日、母さんが死んだ。あるいは、昨日だったのかも知れない。よくわからない。」という、有名な書き出し部分だけで、後は日本語訳で読んだのに違いない。

母親逝去の電報を受け取った主人公が、養老院で行われる葬儀に出かけ、そこから戻って来て殺人事件を起こし、死刑を言い渡されるという大筋だけは覚えていてるものの、細部についての記憶はない。

原語で読めば、もう少し丁寧な鑑賞ができるのではないかと考えた。今や、受験生ではないので、急かされること入った作品を原稿用紙に書き写してみようというのを読んだことがある。言い回しや描写の工夫、作品の構成など、単に読んでいるだけでは気づかない作品の細部に目が向くことになるのだろう。私は、プロの文筆家ではないし、いずれフランス語で文章を書こうと思っているわけでもないが、速読ばかりが読書法ではないだろうとの思いから、「異邦人」を原文で読むついでに、その全文をノートに書き写してみようという、無謀なことを考えた。いわば、超速読の正反対のことをしてみようと思ったのである。

そして半年、超速読はなんとか終わった。半年間で読んだ本は、概ねこの「異邦人」一冊だから、本離れという点では若者に負けないということになる。

先にも記したように、「異邦人」は、文庫本でおよそ二〇〇頁なので、一日平均、一頁強を書き写したことになる。写し取ったノートは、大学ノートで十冊を超えた。ただし、一行置きに写したので、行を詰めれば五、六冊、さらに、見開き二頁のうちの片側をメモ用に空けたのでさらに半分つまり、「異邦人」は、大学ノート三冊に納まる分量ということになる。

もちろん、分量が大事なのではなく、書き写しの効能の方が大事なのだが、特に名文が書けるようになったとか、読みが深くなったとかという自覚はない。途中から、カミ

ユが乗り移ってくるのを感じながら作業したといえ、納得してくれる人がいるかもしれないが、それには何の証拠もない。

書き写しをしながらなので、確かに、細かい所に目が向くようにはなった。直接話法と間接話法の使用が不自然に思われるところ、過去形に訳すべきところが現在形になっているところなど、こちらの無知故の疑問なのだろうと考えたが、その最たるものの一つが以下の言い回しである。昔の恋人と再開した主人公が、一緒にプールに出かけ、彼女をプールから引き上げる際に軽く胸に触れるという、思わせぶりなシーンがあり、それに続いて、逐語訳すると「彼女は 持っていた 髪の毛を 目の中に」という表現が出てくる。何かの拍子に、髪の毛が目に入ったのだろうと考えたのだが、対訳を見ると「目許にかかった髪の毛の向こうで・・・」とある（ちなみに、新潮文庫の訳では「眼のうへの髪の毛がかぶさり・・・」となっている）。いずれにせよ、髪の毛の中に目がある状況なので、逐語訳とは全く逆の意味なのである。そうしたことに気づけたことが、書き写しの効能と言え言えなくもない。

【カミュに挑戦、そして惨敗】

ところで、先に、超遅読は、「後になって、急かされる

と特徴づけられていた点である。もちろん、講座案内を見て、そのことは分かっていたが、実際に始めてみると、私のイメージしていたとはかけ離れた授業の展開であった。もちろん、私の思い込みが原因なのだが。

私が期待していたのは、書き写しで直面していた疑問点、たとえば、時制の使い分けや分詞構文の機能、独特な言い回し等についての解説であり、いわば、一文一文を正確に理解することにあつた。要するに、フランス語で「異邦人」を読むというよりは、「異邦人」でフランス語を学ぶ、ということではなかったかと思うのである。

しかしながら、授業は、文面通り、フランス語で「異邦人」を読んでいくのである。フランス語のテキストは、我々が日本語で小説を読んでいるのと同等の扱いで、独特な言い回しや文法上のことはほとんど問題にされず、それが伝えている意味・内容、主として主人公の心の動きを理解することに重点が置かれていた・・・のだと思う。なぜ、このように歯切れの悪い言い方をするのかというと、先生の説明が十分に理解できていなかったからである。

途中十分ほどの休み時間を挟んでの二〇分の授業は、学生にしゃべる機会を与えないような先生の独演で、フランスの高校や大学の文学の授業は、きつとこのように行われているのだろうと推測するばかりであった。それでも、

状況に「なったと書いた。このことについて記しておこう。時間的な余裕もあり、書き写しは、いいペースで進んでいた。それが狂い出したのは、十月から始まる秋学期の講座案内を見てからのことである。フランス文学講読講座で、「異邦人」を取り上げるといのである。自分が現在進行形で読んでいる作品が、学校の授業で取り上げられるのだから、それを逃すという手はない訳だが、この講座の選択には、そうとばかり言っではいられない事情があつた。

一番の難題は、この講座が、上級者を対象とした講座であるという点である。事務に問い合わせると、先生に確認してくれたらしく、授業は毎回二十頁ほどのペースで進んでいくという。確かに、それくらいのペースでないと十回の授業で終了できないので、仕方がないところだ。ただし、予習という点に関してなら、「書き写し」が大分進んでいるので、しばらくは余裕を持って授業に臨むことができるだろうし、少し気合いを入れれば、講座終了と同時に書き写しも終了できると踏んだのである。

しかしながら、実際に始めてみると、週に二十頁というのは、途方もないスピードで、虎の子の「貯金」はみる取り崩され、すぐに金策に追われるような状況になっていった。

他にも問題があつた。この講座が、フランス文学を読む

さすが上級クラス、先生の説明にうなずいたり（先生の一言一言に、ウン、ウンとあいづちを打つ人もいた）、時には言葉を挟んだり、笑うべき所で笑う人もいて、驚きだった。そういう反応に気づくたびに、「こちらはただただ身を小さくし、「この点について、君はどう思うか？」などと聞かれないようにすることで精一杯だった。

十頁であれ二十頁であれ、「読む」については、時間さえあれば準備はできるので、それほど困ることはないのだが、「聞く」については、いくら時間があるかと予習は不可能であり、その場の勝負であることを痛感する授業であつた。

こうした事情で、途中から急かされる超遅読となつてしまった次第である。もちろん、なぜ、彼女の目の中に、髪の毛が入るような状況になったのか、いや、なぜそれが、髪の毛の奥に目があるような意味になるのかといった、初步的なことを質問できるような状況ではなかったため、疑問は残ったままである。

このように紆余曲折しながら、フランス語学が直しの彷徨は続くのである。